

冬十一月、大伴坂上郎女、帥の家を發ち
て道に上り、筑前国の宗像郡名を
名見山といふを越ゆる時に作る歌一首

九六三番

大汝 少彦名の神こそば 名付けそめけめ
名のみを 名見山と負ひて 我が恋の 千重の一
重も 慰めなくに

同じ坂上郎女、京に向かふ海路にして、浜
の貝を見て作る歌一首

九六四番

我が背子に 恋ふれば苦し 暇あらば 拾ひて
行かむ 恋忘れ貝

冬十二月、大宰帥大伴卿、京に上る時
に、娘子の作る歌二首

九六五番

凡ならば かもかもせむを 恐みと 振りたき
袖を 忍びてあるかも

九六六番

大和道は 雲隠りたり 然れども 我が振る袖を
なめしと思ふな